

〔研究論文〕

G. ソロスの『グローバル資本主義の危機』の意味するもの

小坂 勝昭

〔Article〕

**The Crisis of Global Capitalism, by G. Soros
— Sustainability and Possibility of World Capitalism —****Katsuaki KOSAKA**

Since the Lehmann shock, American capitalism has collapsed because of failures of financial management. G. Soros insisted that the causes of the breakdown of American capitalism were financial engineering, and ROE management seeking short-term profits. Soros has proposed a new paradigm and new ideas about the capitalis system for the near future. The object of this paper is to present Soros' ideas about overcoming the crisis of Global Capitalism. Soros has been influenced by K. Popper at the LSE, especially Popper's "Open Society and its Enemies." gave the more the power to Soros.

This paper has 5 parts.

- (1) What is Global Capitalism?
 - a. The Definition of Global Capitalism
 - b. Soros' Criticism of Global Capitalism
- (2) The Life history of Soros as a Hungarian Jew
- (3) Success Story of Soros
- (4) Concept of Reflexibility
- (5) Possibilities of Open Society Institute

はじめに

グローバル資本主義が世界を次第に席卷し始め、その波及効果は留まるところを知らないように見える。その実態を見れば、こうした波及効果はその根底に「金融システム」のグローバル化がある。92年のわが国におけるバブルの崩壊であり、08年のリーマンショックであった。アメリカのサブプライムローン問題は、住宅債務の証券化として注視されてきた問題であったが、かつてのわが国のバブル崩壊も、日本の住宅ローンの焦げ付きの問題がその前兆であったことを誰もが知るはめになった。ノーベル賞経済学者のJ.スティグリッツは、彼の近著『フリーフォール』の中で、2008年の状況を以下のように述べている。「住宅ローン会社は中身をよく説明しないまま、新種のローンを何百万もの人々に売りつけた。しかし、銀行と格付け会社という共犯がいなければ、このような悪さをはたらくことはできなかつたはずだ。銀行は住宅ローン債権を買い取り、自社でパッケージし直し、出来上がった金融商品を不用心な投資家に売りつけた。」(スティグリッツ、楡井・峯村訳、

32頁) こうして、格付け会社が有毒商品に太鼓判をおし、労働者の老後の蓄えさえ奪うという構図が出来上がった。グリーディな銀行家、格付け企業、ローン会社が結託して「低所得層」の生活を更に貧困へと追い詰めたと言ってよかろう。

リーマンショック以降の世界の動向をみると、グローバル化が何を引き起こすのかは見えてこない。グローバル化の意味するものとは何かが最近の課題であったが、錬金術師と呼ばれてきたジョージ・ソロス(1930～)の投資行動とは一体どのようなものであったのか、その実態を知ることにはできるのか、という問題意識に囚われ始めた。

この論文を書くきっかけを与えてくれたのは、実は、ジョージ・ソロスの『グローバル資本主義の危機—開かれた社会を求めて』(1998年、大原訳、1999年)であった。単なる投資家としてソロスを見ていたが、「稀代の相場師」、「ヘッジファンドの帝王」と呼ばれる成功者である。しかし、彼について書かれた賞賛と、驚愕に満ちた評価の背後にはハンガリー系ユダヤ人としての並大抵ではない生活と、生命の危機をくぐり抜けてきた苦勞があったことを知った。彼の苦澁に満ちた体験とともに、ロンドン大学時代にソロスが哲学者のK. ポパーから受けた学問的な影響と、それ以降の彼のビジネス世界での成功を理論的に裏付ける根拠としてK. ポパーの「開かれた社会」の概念が重要な役割を演じたのか否かがもう一つの研究テーマとなった。

1956年にニューヨークへ出てビジネスの世界に入り彼が選んだ仕事は「鞘取りトレーダー」(arbitrage trader)、及び「アナリスト」としての仕事であった。投資家として成功を収めた彼の30代以降のライフヒストリーを知るにつけ、ソロスが実は非常に透徹した「世界観」を抱く哲学者であり、また思想家ではないか、と考えるようになった。ソロスについて書かれたものや、翻訳を片端から集めて読み始めたところ、彼がK. ポッパーの『開かれた社会とその論敵』で展開された「開かれた社会」の概念の影響を受けたことを知った。ソロスの大学時代の恩師であった哲学者ポパーの影響についても今後研究を重ねていきたい。

ポパーについては、東北大学文学研究科の助手時代に、ポパー研究者として著名でポパーの翻訳を手掛けておられた故森博(元東北大学教授)が夏休み毎にフランスの国会図書館で資料収集をなさっているらしい、という噂だけは聞こえていた。残念ながら当時の筆者は、世界の動きに鈍感な一介の青年に過ぎなかった。仙台を離れた後、イリノイ大学商学部での在外研究の機会を与えられ、初めて世界に触れた思いがしたのであった。ソロスを読みながら、ポパーを研究対象にすることを考えたことがなかったことを今更ながら悔やんでいる。

Chap. I . グローバル資本主義とは何か

(1) グローバル資本主義の定義

私たちが置かれてきたグローバル経済は、モノやサービスの自由な貿易はむろんのこと、資本の自由な移動を特徴としていることは、今日誰でも知っている。日常生活を送る上で、日々の暮らしに必要な、衣、食、住のいずれもが中国、タイ、マレーシア、ベトナムなどの発展途上国で生産された製品である。ソロスの言葉を借りれば、以下ようになる。

「さまざまな国の金利、為替レート、株価が密接に関連し、グローバル金融市場が経済の状態に途方もなく大きな影響を及ぼしている。個々の国の富に国際金融資本がきわめて重要な役割を果たしていることを考えると、グローバル資本主義システムと呼んでこれを論じることは、あながち不適切でもないだろう。」(大原訳、167頁)さらに以下のように続ける。

「このシステムは金融資本にとって実に好都合にできている。金融資本はもっとも見返りの大きい場所に自由に移動することができ、それがまたグローバル金融市場の急成長に繋がった。その結果、センターの金融市場や金融機関に資本を吸い込み、それを融資やポートフォリオ(資産運用)投資の形で直接、あるいは多国籍企業を通じて間接的に周縁地域に送り込む巨大な循環系ができあがっている。この循環系は、活発に動いているかぎり、他のほとんどの勢力を影の薄いものにする。」(大原訳、168頁)

ここまでの叙述は、国際経営論や、国際金融論の教科書を読めば必ず書かれている内容である。ソロスでなければ書けない内容の叙述ではなかろう。では何故、ソロスにこだわるのか。彼は『グローバル資本主義の危機』の中で次のように断言する。「私は市場システムが人間の取り決めた他のすべてのものと同じく、もともと欠点をかかえたものであると信じている。この信念が本書の全体を通じての分析の基礎にあり、同時に私の個人的哲学や、私のファンドの資産上の成功の基礎にもあるといえる。」(大原訳、71頁)と。ソロスは、「市場原理主義」をまっこうから批判しているのである。

(2) ソロスのグローバル資本主義『批判』

ソロスがただの投資家でないことは、以上に引用した叙述で充分であろう。しかし、彼がグローバル資本主義が危機的であるというとき、それはどのような状態を危機と呼ぶのだろうか。錬金術師の異名をとったソロスである。いったい危機とはどのような状態を言うのか。

「このシステムには重大な欠陥がある。資本主義が勝ち続けるかぎり、マネーの追求が他のあらゆる社会的課題に対応すべきグローバル社会の発達に伴ってこなかった。政治・社会生活の基本単位は依然として国民国家のまま。そのうえ、センターと周縁地域の関係もはなはだしく不平等だ。」(大原訳、168頁) 要するに、グローバル経済の進展のためには経済をとりまく「グローバル社会」の進展と充実が不可欠であるという主張であろう。

ソロスの真骨頂は、『グローバル資本主義の危機』の第6章、および第7章の記述にある。市場原理が決して完璧ではないことから多くの差別的な構造が世界を覆っていると執筆者は考えており、ソロスの後半部分の分析は、世界のロシア、アジア諸国、とりわけ日本の金融政策の失敗にも言及している。グローバル資本主義の進展が、金融市場に大きな問題を投げかけると同時に格差社会をも生み出しているとすれば今後われわれはこうした社会にどう対処すればいいのだろうか。ソロスは、「グローバル資本主義の危機」がなぜ生じるのかを真面目に論じており、繰り返すが、危機の原因を「市場原理主義」に求めているのである。こうしたソロスの立論を前提に、彼のライフヒストリーをみていこう。

Chap. II. ソロス (George Soros) のライフヒストリー

ソロスは、有名人の仲間入りを達成しているので英文の Wikipedia には19頁のスペースが割かれている。本稿は、Wikipedia の記述の上に本人が彼の主要な著作で書きしるした内容を読解したうえで付け加えた。

1930年8月12日、ハンガリーのブタペスト生まれの82才である。父親の Teodora と母親の Elizabeth の間に生を受けた。父親はハンガリー系のユダヤ人弁護士である。1936年、次第に勢いを増す「反

ユダヤの風潮」(Semitism)から逃げるために家族名を Schwartz から Soros へ変えている。父親は、Soros が生まれた時からエスペラント語を話すように教えた。Soros は後年、ユダヤ人の家庭で育ったため両親は宗教的なルーツに大変敏感であったと語っている。二度の離婚を経験したが、最初の妻 Annaliese Witschak との間に三人の子供 (Robert, Andrea, Jonathan) を、二番目の妻 Susan Weber Soros との間には二人の子供 (Alexander, Gregory) を儲けた。また、彼の上の兄である Paul Soros は、エンジニアであるが、個人投資家であり、慈善家でもある。若いアメリカ人のための研究奨学金財団 (Paul and Daisy Soros Fellowships) を設立している。

(1) 幼少時代の「ナチ占領」下の経験

ソロスが、13歳の1944年3月、ナチドイツがハンガリーを占領した。ナチのハンガリー支配下で確立された「ユダヤ協議会」でソロスは仕事を与えられた。ハンガリー政府の反ユダヤ政策のため「ユダヤ協議会」は子供たちにユダヤの「国外追放の通告」を配布する仕事を与えた。細長い紙片には「午前9時にラビのセミナーがあります」と書かれていた。ソロスの父親は直ちに事情を理解した。国外追放の通告だと。14歳のソロスは、農業省の仕事で国外に逃げた豊かなユダヤ人家族の農園の目録作りをあたえられた。ブタペスト市には若いソロスだけが残され、ロシアとドイツの軍隊が家から家へと攻撃するブタペストの戦いにも生き残った。ソロスが父親から教わったことの中で最も教訓となったのは、「生きぬくためには手段を選ばぬ」という一言であった。実際、「ユダヤ人ではない」と記した偽物の身分証明書を手に入れ、たお陰でたくさんの人が命拾いをしたと述べている。(ソロス・山本、2008)

(2) イギリスへの移住 - ロンドン大学への入学

1947年、ソロスは永久の地を求めてイギリスへ移住した。貧乏な学生として伯父の家に住み込んだ。普通のユダヤ教徒であった伯父はソロスの生活費を支払ってくれた。お陰で、彼はロンドン大学 (London School of Economics) から「科学哲学」の学士号を受けた。彼は哲学者のカール・ポパーの学生として鉄道のポーターなどのアルバイトをして働いた。大学の指導チューターでもあったポパーの計らいでクエーカー教徒の団体 (Religious Society of Friends) のチャリティーで40ポンドを支給されることになった。その時から彼はイギリス商業銀行との帳簿レベルの取引を次第に確保することができた。

(3) ニューヨークへの移住 - トレーダーへの道

1956年、ソロスはニューヨークへ移動する。そして、ここで「鞆取引のトレーダー」となり、またアナリストとしての仕事に従事し、紆余曲折を経てそれ以後、彼の投資家としての出発点を形成したのがトレーダーの仕事であった。この仕事をする中で、ソロスはポパーのアイディアに基づき「再帰性」(reflexivity)の哲学を展開させていく。再帰性とは、市場での査定(評価)を見守る参加者としての行為が「有徳と悪徳の循環」の過程に影響を与える「信念」(belief)であるとソロスは考えている。しかしながら、ソロスは再帰性の考え方が決して「金を産みださない」と悟らざるを得なかった。それ以降のソロスは自分自身への投資を考え、そのためにどのような投資商品を用意すればいいのかを徹底して研究し始めた。1963年から73年まで彼は、Arnhold and S.Bleichroderで働き、副社長のポストを獲得した。そして、最後にはソロスは自分が哲学者や重役ではなく「より良き投資家」であるという結論に行き着く。1967年、ソロスは会社を説得して海外投資信託会社First Eagleを立

ち上げた。また、1969年には、Double Eagleというヘッジ・ファンドを設立した。しかし、1973年の「投資規制強化」のため、ソ罗斯はそれまでの役職を辞任し、個人の投資会社を設立した。その企業は発展して有名なクオンタム・ファンド(Quantum Fund)となった。彼は自分が哲学者であることを支持してもらうためには、ウォールストリートで働く人間として十分なマネーを稼ぐことが自分の意図であり、それが可能であると信じた。5年後彼の計算では50万ドルの稼ぎが可能であると弾いていた。

1970年、ソ罗斯はSoros Fund ManagementをJ.ロジャーズと設立し、73年には顧客の投資家から集めた1200万USドルを元手に自分のヘッジファンド会社を設立した。最初はソ罗斯・ファンド(Soros Fund)と呼んでいたが、Quantum Fundへと改名したのであった。2000年には、Quantaum Group of Fundが再組織され、その後に旗艦的役割を果たすこととなる Quantaum Endowment Fundを立ち上げている。そして、Soros Fund Managementの代表におさまったソ罗斯がQuantaumの経営に積極的にかかわるという構図であった。R.スレイターは、彼の著書『ソ罗斯』(三上訳、272-273頁)のなかで、ソ罗斯がクオンタムファンドを率いて驚異的な運用実績をあげ、「ヘッジファンドの帝王」と呼ばれるようになった経緯について述べている。90年代初頭、ヘッジファンドは緩やかな規制の下で繁榮し、金融界の最前線に立つ。その当時、スタインハート、ロバートソン、クーパーマン、などが他にも活躍していた。ウォール・ストリート・ジャーナル誌が「ウォール街の最大の賭博場」と呼んだ時期であり、その頂点にソ罗斯がいた。ソ罗斯氏を有名にしたのが1992年の秋に起こったポンド危機であった。東西ドイツ統一以来、金利が上昇していたマルクの価値に引っ張られて欧州全体の金利が上昇し、イギリスポンドも過大評価されていた。この状況に目をつけたのがソ罗斯のクオンタム・ファンドであった。イギリス政府がポンドの価値を維持できないとみたソ罗斯は1992年8月に大量のポンド売りを開始、ソ罗斯は約1兆円をこす資金を投入した。イギリス政府による大量の資金投入にもかかわらずイングランド銀行の損失は1兆円をこえ、ソ罗斯は「イングランド銀行を破産させた男」として一躍有名人となった。(ソ罗斯・山本、2008、30-31頁。)

Chap. Ⅲ . ソ罗斯の「再帰性」概念と彼の世界認識

(1) 人間は世界を理解することはできない。

リーマンショックの直前に書き上げたソ罗斯の『金融マーケットの新しいパラダイムの構築』(日本語訳は『ソ罗斯は警告する』(2008.)を読んで驚かされるのは、彼の「認識論」であろう。社会科学の教科書にでもなるような書き方に出会い、「個人と社会」問題の基本的発想がここにある、と考え込んでしまった。『グローバル資本主義の危機』の巻末に榊原英資が解説をよせている。そこにはこう書かれている。「ソ罗斯と他のヘッジファンドのマネージャー達との決定的違いは、ソ罗斯が哲学や思想、あるいは経済学にそれなりの学識をもった当代一流の知識人であるという点だ。事実、ソ罗斯はファンドの運営はスタンレー・ドラッケンミラーらの部下にまかせ、もっぱら慈善事業や執筆などにその時間の大部分をさいている。」(大原訳、351頁。)こうした指摘のとおり、ソ罗斯の哲学的思索は、以下の引用から容易に類推できる。

「私たちは世界の一部であるために、その世界を完全な形では理解できない。特に、人間が人間社会について理解しようとする、観察者である人間もまた観察対象である人間社会の一部であるという事実が、理解の妨げとして最大の障碍となる。一方で人間は、自分が生きる世界を知識とし

て理解しようとする。私はこれを「認知機能」と呼ぶ。その一方で人間は世界に影響を与えようとし、自分にとって都合のよいように改造しようとする。かつて私はこれを「参加機能」と呼んでいたが、今では「操作機能」と呼ぶほうが適切であると考えている。」(ソロス、2008.徳川訳(2008) 44頁。)

この操作機能とは、認知科学では、「執行機能」と呼ばれるものであり、アリストテレスは、これを「実践理性」と呼んだ。(同訳書、44頁。)ソロスは、知識の獲得だけを目的とし、現世の利害に興味のない社会学者にとっては「認知機能」と「参加機能」は相互に無関係であろうが、社会現象への参加者にとっては、認知機能と参加機能は干渉しあうかもしれないという。ソロスの主張は、認知機能と参加機能が同時に作用している場合、その社会現象は参加者の未来に対する意図や期待によっても構成されることになる。こうした表現から推測できるのは、社会に実践的に関わっていくことを無情の喜びとするソロスの姿である。ソロスの著作を読んでいてソロスのある矛盾する側面も見出すことができるだろう。ソロスは一時期、哲学者になることを夢みていた。K.ポパーの科学哲学に夢中になった当時のソロスからは投資家としてのソロスは想像するのが難かしいだろう。

(2) 人間と社会は互いに干渉しあう —再帰性の概念—

「過去」はすでに決定しているが、「未来」は参加者の決断によって決定されることになる。ソロスは何故にこうした哲学的な認識論に囚われたのだろうか。こうした社会認識は、自らのいかなる行動も、実は何らかの影響力を他者に与え、未来を変える可能性をもつということなのか。ソロスの人生を考えていくと、投資活動に専念していた時代、巨額の報酬がもたらされた。その後、投資活動で得た富を「慈善活動」に振り向けてきた彼の人生からは、自分が世界を動かすことの可能な、従って、歴史を形成することに携わる「エリート集団」の仲間に入ることが許されたほんの一握りの人間のみが持つ可能性についても考えざるを得ないのであるか。ソロスの言葉を引用すれば、次のようになる。

「ある社会現象における参加者の、未来に対する意図や期待が、その社会現象の中で果たす役割は、参加者の施行と社会現象の間に双方向の繋がりを作り出すことになる。そして、その双方向性によって、社会現象の展開に不確実性なり偶発性が生じ、いっぽう、参加者の観察事項は知識として不完全なものになるのである。」(上掲訳書、45頁。)同様の記述はすでに『グローバル資本主義の危機』(ソロス、1998、大原訳、43-45頁。)において展開されている。次節で述べる「再帰性」概念がソロス理解には不可欠なのである。但し、大原訳では再帰性を「相互作用」と翻訳している。(脚注1)ソロスは、かなりの著作を公刊しているが、再帰性については、他の文献においてもかなり熱心に繰り返して述べている。新しい文献では、翻訳『ソロスは警告する』(The New Paradigm for Financial Markets, 2008.)における「再帰性」概念についても読んだが、ソロスの「信念」ともいえる何かを感じる。ソロスの初期の著作から再帰性の概念について述べた部分を検討してみよう(『相場心の心を読む』1988、31-103頁。)この著作の理論篇に相当する部分は、後に改訂された『ソロスは警告する』の第3章、第4章においても論じられている。

(3) 金融市場における「再帰性」

「再帰的な出来事が現実にはどのように起こるものであり、それらがどのような形で歴史的な事

件になっていったのかを、金融市場の動きを通じて分析してみたいと思う。」(ソロス、2008.徳川訳、106頁。)と。

ソロスにとっては、金融市場は、再帰性理論の妥当性を試す「実験場」であった。ソロスの疑問点は、一般的に受け入れられている「金融市場は均衡点に向かって収斂する」という「均衡理論」の考えかたに対するものであった。もし、均衡理論が正しければ「再帰性」は存在しないことになる。ソロスが、金融市場における再帰性の必要性に言及した始めた作品が1987年の処女作『相場の心を読む』であり、1994年版は『ソロスの錬金術』(新版2003.青柳訳、2009.)と翻訳のタイトルが変更されている。ソロスはこの1987年の処女作を自分のライフワークであると述べたが、本書のもたらした反響の大きさに彼自身が驚き、「再帰性理論」に対して確実に自信を抱いたことだろう。「錬金術師」と呼ばれたソロスであったが、根本的な発想は、非常に哲学的である。

かつては哲学者になりたいという願望を抱いていたほど哲学を愛したソロスである。現実の動きを熟知することなど不可能であるという世界観を持ち、それは何故なのかを明らかにしたいと熟慮を重ねてきたが、「株式市場」の持つ特性を知るにつけ、実験場としては最適であるという確信を持つにいたる。ビジネス界に入り、投資家として成功し錬金術師と呼ばれるようになったソロスであったが、自分は何も特別なことはしていない、という確信を持っていたに違いない。彼の世界観は、再帰性の理論から充分に知りうるのであるが、同業他者の抱く羨望に応えたいと言うのがソロスのホンネであろう。だからこそ自らが提案してきた「再帰性」の理論のもつ分析力を理解していただきたいという提案のように思われる。しかし、はじめは「再帰性」のアイディアに対する世間の反応はほとんどなかったことに、多分失望していたであろう。ソロスの哲学的思考は投資家には理解の及ばないレベルのものだったのである。再帰性の理論は投資家にはあまりに抽象的であった。しかし、彼ら投資家たちはソロスの哲学を理解しようと彼の講話に聞き入ったのだ。

(4) 株式市場における再帰性

1987年の『相場の心を読む』および、1994年の『新版ソロスの錬金術』は、各種の統計データを駆使した非常に説得力のある著作である。新版の第1章は「株式市場における再帰性」で始まる。冒頭のソロスの記述を長くなるが以下に引用させていただく。投資家ソロスの経験が如実に発揮されているだけでなく、投資と再帰性との関連が見事に説明されているからである。

「まず株式市場から始めようと思う。それは、一つには私が20年以上もプロの投資家として株式市場にかかわってきたので、この市場を知り尽くしているからである。もう一つの理由は、株式市場が理論の検証に最も適しているからである。推移が数量的に表わされているうえに、データの入手も容易である。参加者の考えも、多くの場合ブローカーのレポートという形で手に入る。その中でも、最も大きな理由は、私がすでに株式市場で理論の検証をしており、興味深いケース・スタディをいくつか持っているからである。先に述べたように、私は株式市場での活動をベースにして、再帰性の概念を発展させたのではない。再帰理論は抽象的な哲学的思索として出発したが、その後で株の値動きとの関連性が発見されたのである。不思議なことに、そのときは抽象的なレベルでの理論構成には失敗してしまった。哲学者としての失敗は、投資家としてのキャリアとは著しい対照をなしている。したがって、私が到達したところから出発点へさかのぼる方法をとるほうが、難解な抽象的議論のなかで、混乱しなくてすむのではないかと思う。」(青柳訳『錬金術』、83頁。)

バブルが崩壊したあと、世間や、学会ではなぜ経済学者がそうした崩壊を予測できなかったのか、と経済学批判が展開されたが、ソロスも矢張り同様の指摘を行っていた。経済学の領域においては、実は、経済学者は現行の経済学のパラダイムに対して失望し始めている、と感じていた。「2007年8月に弾けて、現在も金融界に混乱をもたらしつつあるサブプライム・バブルは、経済を理解するための新しい思考の必要性を世間に広く知らしめることになるであろう。」(ソロス、2008. 徳川訳『警告』、107頁)と。

むすびにかえて

ヘッジファンドの経営者として成功したソロスは、1979年、「オープン・ソサエティ基金」(現在の名称はオープン・ソサエティ・インスティテュート財団)を設立している。当初は、クローズド・ソサエティを開放することを目指したが、ソビエト帝国の崩壊以降は、クローズド・ソサエティをオープン・ソサエティに移行することを活動の中心においている。

ソロス自身はポパーの『開かれた社会とその論敵』の影響を受けたことをあちこちで論じており、究極的には、世界の金融市場の再編成さえ視野に入れていることを知った。そのために、「オープン・ソサエティ」という概念を重視していることを認識することになった。ソロスは、ナチズム、共産主義のいずれの体制も「オープン・ソサエティ」ではなく、むしろ「クローズド・ソサエティ」であるという認識を持ってきた。ソロスの『グローバル資本主義の危機』第5章の「開かれた社会」の中で以下のように論じている。

「束縛された個人はどうすれば社会とつながりをもてるのだろうか。もっと抽象的な言い方をすれば、束縛された個人たちから成る世界はどうすればグローバルな開かれた社会の形成に協力することができるのか。それにはわれわれが誤りを免れない存在であるという「誤謬説」⁽²⁾を認めることが必要であるが、それだけでは十分ではない。更なるつながりの輪が必要である。」(大原進訳、160頁)さらに、ポパーの『よりよき世界を求めて』(1984)で展開されている主張は、哲学者ポパーの真骨頂ともいえる内容のものであり、多分、ソロスの最終的願望もこのタイトルで示されたよき社会の追及こそが最終的な課題なのであろう。

(脚注)

- (1) ソロスの「再帰性」(reflexivity) 概念については、彼の著作全般に登場することからソロス自身が重視している概念である事が伺える。社会学者のマートン、哲学者のポパーなどがこの概念に言及している。Wikipedia 参照。
- (2) ソロスの「誤謬説」(fallibility) とは、宗教、イデオロギー、理論、制度など人間によってつくられたものは不完全であり、不完全ゆえに歴史は永遠に変化しつづけるというのである。人間の知識の不完全さを指す言葉であり、ポパーの科学論の影響を受けている。

(ソロスの著作)

George Soros(1987, 1994, 2003)、The Alchemy of Finance. (青柳孝直訳『新版・ソロスの錬金術』総合法令出版.2009.) (深谷淳一訳(1987年版)『相場の心を読む』講談社、1988)

——(1998)、The Crisis of Global Capitalism. (大原進訳『グローバル資本主義の危機—開かれた社

会を求めて』、1999.)

——(2000)、Open Society – Reforming Global Capitalism.

(山田侑平・藤井清美『ソロスの資本主義改革論－オープンソサエティを求めて』、日本経済新聞社、2001.)

——(2002)、George Soros on Globalization.(榊原英資監訳・藤井清美訳『グローバル・オープン・ソサエティ』ダイヤモンド社、2003.)

——(2004)、The Bubble of American Supremacy.(寺島実郎監訳・藤井清美訳『ブッシュへの宣戦布告』ダイヤモンド社、2004.)

——(2005)、The Winning Investment Habits of Warren Buffett & George Soros – What you can learn from the World's Richest Investors.(望月衛訳『バフェットとソロス－勝利の投資学』、ダイヤモンド社、2005.)

——(2005)、ジョージ・ソロス+山本正『ジョージ・ソロス－投資と慈善の哲学』、NHK出版、2008.

——(2006)、The Age of Fallibility.(越智道雄訳『世界秩序の崩壊』2009.)

——(2008)、The New Paradigm of Financial Markets.(徳川家広訳・松藤民輔解説『ソロスは警告する』、2008.)

——(2008)、Epigram of 108 George Soros.(青柳孝直訳『ジョージ・ソロス不滅の警句』、総合法令.)

——(2009) The New Paradigm of Financial Market (rev.ed.) (徳川家広訳『ソロスは警告する2009』、2009.)

——(2010) Soros Lectures by George Soros.(徳川家広訳『ソロスの講義録』2010.)

(その他の著書、論文)

Johon Armour and Joseph A McCahery(2006) After Enron,Hart Pub.

Walter Block(1976) Defending The Defendable, 橘玲訳(2011)『不道德な経済学』講談社α文庫.

Wayne Ellwood(2001) The Non – Nonsense Guide to Globalization. 渡辺雅男・姉齒暁訳『グローバリゼーションとはなにか』、こぶし書房.

Peter C.Fusaro & Ross M.Miller(2002) What Went Wrong. 橋本碩也訳『エンロン崩壊の真実』、税務経理協会.

Charles R.Morris(2008) The Trillion Dallar Meltdown. 山岡洋一訳『なぜ、アメリカ経済は崩壊に向かうのかー』信用バブルという怪物』日本経済新聞出版社.

Anthony Giddens(1998)、The Third Way. 佐和隆光訳(1999)『第三の道－効率と公正の新たな同盟』、日本経済新聞社.

——(2001)、Runaway World. 佐和隆光訳『暴走する世界－グローバリゼーションは何をどう変えるか』、ダイヤモンド社.

原丈人(2010)『新しい資本主義－』希望の大国・日本の可能性』PHP新書.

原丈人・金児昭「2010」『だれかを犠牲にする経済はもういらぬ』、ウエッジ.

伊藤元重(2009)『危機を超えて－全てが分かる「世界大不況」講義』、講談社.

猪木武徳(2009)『戦後世界「経済史」』中公新書.

自由企業研究会著(1993)『新しい資本主義』、PHP研究所.

Anatole Kaletsky(2010) Capitaism 4.0, Public Affairs.

- Michael T. Kaufman(2002) *Soros – The Life and Times of A Messianic Billionaire*. 金子宣子訳『ソロス』ダイヤモンド社、2004.
- Michael Kinsley(2008) *Creative Capitalism*. 和泉裕子・山田美明訳『ゲイツとバフェットー新しい資本主義を語る』、2009.
- Paul Krugman(1994) 北村行伸編著『資本主義経済の幻想ーコモンセンスとしての経済学』、ダイヤモンド社.
- 草刈龍平(1999)『ジョージ・ソロスー悪魔の21世紀戦略』第一企画出版.
- Karl Popper(1945) *The Open Society and Its Enemies*. 武田弘道訳『自由社会の哲学とその論敵』、1973. 内田・小河原訳(上・下)、1980.
- Karl Popper(1984) *Auf der Suche nach einer besseren Welt*. 小川原誠・蔭山泰之訳『よりよき世界を求めて』、未来社、1995.
- 神谷秀樹(2008)『強欲資本主義ーウォール街の自爆』、文春新書.
- 武藤敏郎・大和総研編(2009)『米国発金融再編の衝撃』、日本経済新聞出版社.
- 中村友一郎(2010)『マネー資本主義を制御せよ』、朝日新書.
- 長尾龍一(1994)『開かれた社会の哲学』、未来社.
- 中谷巖(2008)『資本主義はなぜ自壊したのか』、集英社インターナショナル.
- 日本経済新聞社(1974)「特集ー経済体制の理念と現実」、季刊『現代経済』(12)所収論文.
- 奥村宏(2002)『エンロンの衝撃ー株式会社の危機』、NTT出版.
- Ayn Rand(1966) *Capitalism, A Signet Book*.
——(1964) *The Virtue of Selfishness*. 藤森かよ子訳『利己主義という気概ーエゴイズムを積極的に肯定する』ビジネス社2008.
- Robert B.Reich(2008) *Supercapitalism*. 雨宮寛・今井章子訳『暴走する資本主義』、東洋経済新報社.
佐伯啓思「1993」『成長経済の終焉』、ダイヤモンド社.
- 榊原英資(2009)『メルトダウンー21世紀型金融恐慌の深層』、朝日新聞出版.
- Robert Slater(1996) *SOROS – The Life, Times, & Trading Secrets of the World’s Greatest Investor*. (三上義一訳『ソロス』早川書房、1995.)
- 篠原匡(2009)『腹八分の資本主義』新潮新書.
佐和隆光「1995」『資本主義の再定義』岩波書店.
佐和隆光(2000)『市場主義の終焉』、岩波新書.
- A.R.Sorkin(2009) *Too Big To Fail*. 加賀山卓朗訳『リーマンショックーコンフィデンシャルー』追いつめられた金融エリートたち』(上・下)、早川書房.
- Joseph E. Stiglitz(2010) *Freefall*. 楡井浩一・峯村利哉訳『フリーフォールーグローバル経済はどこまで落ちるのか』、徳間書房、2010.
東京財団政策研究部(2010)「21世紀にふさわしい資本主義の再設計ー健全な企業経営と公益」.
- 横川・野口・伊藤編著(1999)『進化する資本主義』、日本評論社.
- Muhamad yunus(2007) *Creating A World without Povety*. 猪熊弘子訳『貧困のない世界を創るーソーシャル・ビジネスと新しい資本主義』、早川書房.
- 渡辺幹雄(1996)『ハイエクと現代自由主義』、春秋社.